

# 俳句教材とその指導

——小・中学校の場合——

小 瀬 渺 美

## 1

最初に現行学習指導要領について、その特質に触れてみたい。

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領は、昭和二十二年の試案に始まって、数回にわたる改訂が加えられ、時代の風潮や社会の要請に対応しながら変遷をたどって現行の学習指導要領に到るわけであるが、前指導要領と今回のそれを比較して、大きく改訂された点のひとつに言語活動に対する考え方を改めたということがある。

従来の指導要領においては、言語活動は表現・理解の両面を意識しつつ、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び書くこと」という二領域四分野と「ことばに関する事項」という形でとらえられていた。これを今回は「言語事項」と「表現」「理解」の三領域に改めるという内容構成に整理するという改訂がなされたわけである。

「話す」「聞く」「読む」「書く」という四領域に分け

るといふ考え方は、言語活動の形態を中心にした分類方法であり、言語活動そのものから言えば、表現・理解という行為の媒材が音声言語か文字言語かの差異、言語による伝達行為の直接的媒体が聴覚か視覚かのちがいはあるけれども、表現・理解という言語行為そのものの本質に相違があるわけではない。

その意味から言えば、今回の学習指導要領は言語活動の実情に即した考え方であるとみることができ、言語生活に必要な言語意識や言語能力を培うという立場からみても妥当な考え方であると言えよう。

この表現行為・理解行為は、双方がそれぞれ独立した言語現象または言語行為として存在するのではない。表現は理解を前提とし、理解は表現をまって初めて成立する言語行為であって、相互にかかわり合いながら総合的な言語感覚や言語能力が形成されてゆくのである。

新学習指導要領には、国語科の「目標」を、小学校では、25

「国語を正確に理解し表現する能力を養うとともに、国語に対する関心を深め、言語感覚を養い、国語を尊重する態度を育てる。」

とし、この小学校で養われた能力や態度を基礎として、中学校では、

「国語を正確に理解し表現する能力を高めるとともに、国語に対する認識を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重する態度を育てる。」

と示されている。さらにこの考え方は、高等学校の学習指導要領にも発展的に展開され、

「国語を的確に理解し、適切に表現する能力を身につけるとともに、言語文化に対する関心を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」と示されている。

この目標は、児童・生徒の発達段階をふまえて、  
 正確に理解し表現する能力を養う。(小)  
 正確に理解し表現する能力を高める。(中)  
 的確に理解し、適切に表現する能力を身につけさせる。(高)

といった配慮がなされていることに留意しなければならぬであろう。

次に各学年の目標を眺めてみると、まず小学校では「目標(1) (表現)」「目標(2) (理解)」に分けて説明されているが、ここではその「目標(2) (理解)」の領域に限って眺

めてみたい。

「理解」領域即ち、小学校学習指導要領での「目標(2)」、中学校では「目標(3)」となっているが、これを整理して、児童生徒の発達段階に即してどう配慮されているかをみると、学年ごとの目標には次のような重点をとり出すことができる。

小学校学習指導要領の目標(2)の重点をとり出すと、

学年	理解能力	読書の態度
1	大体をつかむ。	楽しんで読む。
2	順序や場面の移り変わりがわかる。	進んで読む。
3	要点をつかむ。	いろいろな読み物を読む。
4	要点相互の関係、中心点がわかる。	読みの範囲を広げる。
5	主題・要旨をつかむ。	知識を増し、心情を豊かにする。
6	目的、種類、形態に応じて効果的に読む。	適切な読み物を選んで読む。

こうした指導のねらいは、さらに中学校にも及び、次のような重点をみることができる。

学年	理解能力	読書の態度
1	内容を正確に理解する。	読書に親しむ。
2	理解する能力を高める。	読書に親しみ自己を豊かにする。
3	目的、場に応じた的確に理解する。	読書を生活に役立てる。

これらを見ると、小・中学校にわたって、「理解」領域の能力・態度の両面にわたって、児童生徒の発達段階に即した指導の展開が、系統的に配慮されているのである。

このことを概括的にみるならば、小学校低学年においては、順序や場面の移り変りに従って内容の大体を把握することを基礎的能力と考え、中・高学年にすすむに従って、要点、要点相互の関係をふまえて主題をつかみ、その目的や形態に応じて効果的に理解する能力を高め、小学校で培われた理解能力や態度を基礎として、中学校では正確な理解、場や目的に即した的確な理解の能力を培うことをねらおうとしているのである。

具体的に国語の学習指導を考える場合には、「表現」「理解」両面にわたって、現実の児童生徒の実態や地域の実情

も考慮した上で、学習指導要領に示される目標を具現できるように指導の形態、学習の過程を考えてゆかなければならないということになる。

ここでは、新指導要領の立場に立って、「理解」領域の指導を中心に、特に俳句教材の指導を通して、現行教科書に触れつつ、実際の指導の場における考え方や、指導の方法について考えてみたい。

## 2

ところで、現行の小学校国語教科書における俳句教材の取り扱い方をみると、

ア 短歌と俳句を併載して、鑑賞の能力を高めることをねらいとしているもの（日書・教出）

イ 詩歌の鑑賞能力を高めることをねらいとして、詩・短歌・俳句を鼎載するもの（東書・光村）

ウ ことばの感覚をみがくことと併せて短歌・俳句に親しませようとするもの（学図）

というふうに分けることができる。俳句教材だけを独立単元として扱おうとするものはみられない。

また、作品読みとりの方法を示唆するものとして、

ア 掲出全句に解説、鑑賞文を付し、表現を通して作品の解明と鑑賞の手順を示し、併せて「手びき」で例句を挙げて、季語や季節を探らせ、鑑賞を深めるねらいをもつもの（日書）

イ 作品の一部に解説、鑑賞の短文を掲げ、例句を挙げ、  
て実際に作品の理解を深めさせることを意図したも  
の（東書・教出・光村）

ウ 掲出全句に解説を加え、「てびき」で鑑賞文を書か  
せることをねらうもの（学図）

といった微妙な相違がみられる上、掲出作品の時代や作者  
からみると次のように類別できる。

ア 古典俳句から近代俳句まで掲出しているもの（日書  
・東書・光村）

イ 著名な古典俳句に限定して掲出しているもの（学図）  
ウ 古典俳句も挙げながら、近代俳句に重点をおいてい  
るもの（教出）

こうして小学校教科書にとり挙げられた俳句はすべてで  
三十二句、各教科書における取り挙げ方に従って表示すると  
次のようになる。

なお、この表は便宜的に古典俳句・近代俳句に分け、さ  
らに解説・鑑賞の文章中の作品を○、作品のみを提出して  
いるものを△、手引きに引用されている句を×で示した。

1. 古典俳句

山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉  
目に青葉山ほととぎす初がつを 素堂  
夕立ちや草葉をつかむむら雀 蕪村  
菜の花や月は東に日は西に //

○	日書
○	東書
○ ○	学図
△	教出
	光村

夏河をこすうれしさよ手にぎうり 蕪村  
をの入れて香におどろくや冬木立 //

雪とけて村一ぱいの子どもかな 一茶  
やせがへる負けるな一茶これにあり //

鳴くねこに赤ん目をして手まりかな //

米洗ふ前にほたるの二つ三つ 一

2. 近代俳句

赤とんぼ筑波に雲もなかりけり 子規  
桐一葉日当りながら落ちにけり 虚子  
遠足のおくれ走りてつながりし //

こがらしや海に夕日をふき落す 漱石  
親よりも白き羊や今朝の秋 鬼城  
リラの香と気づきて昼寝さめにけり 草城  
こんこんと水は流れて花菖蒲 亜浪  
をりとりてはらりとおもきすすきかな 蛇笏  
雪山をはひまはりゐるこだまかな //

ひっぱれる糸まつすぐや甲虫 素十  
咲きみちて庭盛り上がる桜草 青邨  
草負うて男もどりぬ星まつり 波郷  
風邪の子が留守あづかるといひくれし汀女  
さみだれやよばれて犬のかへりみる //

跳躍台人なしブル真青なり 秋桜子

×	○	×	○	○	日書
	△	△		○	東書
			△		学図
△	△			△	教出
	△	○	△	△	光村

○

○	○
○	
○	○

ピストルがブールの硬き面にひびき 誓子  
 スケートの紐むすぶ間も逸りつゝ 〃  
 さじなめてわらべたのしも夏水 〃  
 坂くだる寒き夕焼けに腕を振り 楸邨  
 初つばめ父子の友の来てゐる日 〃  
 しづかなる力満ちゆきばったとぶ 〃

×	×
	△
○	
	△
	△

3

次に中学校教科書を眺めてみることにする。中学校の現  
 行教科書では、五社のいづれも三年生で「古典の心」「古  
 典に学ぶ」などの単元で「おくのほそ道」の一部を扱って  
 いるため、俳句教材は一社(学図)を除き、近代俳句に限  
 った取り扱いをしている。その取り扱い方については、小  
 学校の傾向と相通するが、

- ア 初めに数句の鑑賞文を掲げた上、作品数句を挙げて鑑賞を試みさせようとするもの(東書・学図・光村)
- イ 作品のみを掲出して「学習の手引き」で鑑賞の手順を示しながら、鑑賞を实践させようとするもの(三省堂・教出)

に大別できる。

ただし、小学校教科書にみられなかった傾向として、中学校教科書では自由律の句を

- 鑑賞文中にとりあげたもの(光村)
- 作品だけを挙げたもの(東書)

及び、鑑賞の中に生徒作品をとり挙げたもの(学図)がある。

これらの作品及びその取り上げ方を表示してみると次の通りである。

1. 古典俳句

古池や蛙飛び込む水の音 芭蕉  
 さみだれや大河を前に家二軒 蕪村  
 這へば笑へ二つになるぞけさからは 一茶

2. 近代俳句

赤とんぼ筑波に雲もなかりけり 子規  
 梅雨晴れやとところどころに蟻の道 〃  
 庭十歩秋風吹かぬ隈もなし 〃  
 団栗の共に掃かるる落ち葉かな 〃  
 雪残る頂一つ国境 〃  
 いくたびも雪の深さを尋ねけり 〃  
 秋空を二つに断てり椎大樹 虚子  
 春風や鬨志いだきて丘に立つ 〃  
 金亀虫擲つ闇の深さかな 〃  
 流れゆく大根の葉のはやさかな 〃  
 露の幹静かに蟬の歩き居り 〃  
 桐一葉日当たりながら落ちにけり 〃  
 遠山に日のあたりたる枯れ野かな 〃

	三省堂
○ ○ ○	学図
	東書
	教出
	光村

	△	△			三省堂
△				△	学図
		△			東書
△ △ △		△	△ △ △ △		教出
	△		△		光村

赤い椿白い椿と落ちにけり	碧梧桐	△
露の玉蟻たちたちとなりけり	茅舎	△
とび下りて弾みやまずよ寒雀	素十	△
ひっぱれる糸まっすぐや甲虫	鬼城	△
瘦馬のあはれ機嫌や秋高し	普羅	△
新樹かげ朴の広葉は叩き合ふ	草城	△
春の月ふけしともなくかがやけり	蛇笏	△
わらんべのおぼるるばかり初湯かな	〃	△
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり	〃	△
をりとりてはらりとおもきすすきかな	〃	△
雀らも海かけて飛べ吹き流し	波郷	△
はこべらや焦土の色の雀ども	〃	○
犬の舌枯れ野に垂れて真っ赤なり	朱鳥	△
星空へ店よりりんごあふれをり	多佳子	△
よろこべばしきりに落つる木の実かな	風生	○
啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々	秋桜子	△
鶯や前山いよよ雨の中	〃	△
吊橋や百歩の宙の秋の風	〃	△
桑の葉の照るに堪へゆく帰省かな	〃	△
七月の青嶺まちかく熔鋸炉	誓子	△
夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	〃	△
スケートの紐むすぶ間も逸りつつ	〃	△
夏草に汽罐車の車輪来てとまる	〃	△
海に出て木枯帰るところなし	〃	△

万緑の中や吾子の歯生えそむる 草田男  
 冬の水一枝の影も欺かず  
 ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道  
 蒲公英のかたさや海の日も一輪  
 春雷やびりりびりりと真夜の玻璃  
 鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる  
 雉子の眸のかうかうとして売られけり  
 困や焦土の金庫吹き鳴らす  
 冬薔薇紅く咲かんと黒みもつ  
 黒猫の子のぞろぞろと月夜かな  
 炎天に樹々押しのおぼるごとくなり  
 咳の子のなぞぞあそびきりもなや  
 外にも出よ触るるばかりに春の月  
 春暁や水ほとばしり瓦斯熱ゆる  
 秋終わる少女が描く円の中  
 かげろふや上に群がる兵の霊

3. 自由律  
 シャツ雑草にぶっかけておく 一石路  
 月光ほろほろ風鈴に戯れ 井泉水  
 咳をしてもひとり 放哉

4. 生徒作品  
 夏来たりサイクリングのどろはねて

三省堂	△	△	△	△	△	△	△	△
学図	○	△	△	△	△	△	△	△
東書	△	△	△	△	△	△	△	△
教出	△	△	△	△	△	△	△	△
光村	○	△	△	△	△	△	△	△

以上のように中学校の国語教科書に掲出されている俳句は六十句である。

これらの中で、二社以上が取りあげている句はわずか九句にすぎない。このあたりに教材としての俳句の作品選択のむずかしさがあるように思われる。

なお、参考のために、中学校の古典教材の中でとり上げられている俳句を挙げておこう。主として中学校三年での「おくのほそ道」を中心とする単元の中に出てくるものである。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな  
芭蕉

旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる  
〃

草の戸も住み替る代ぞ雛の家  
〃

行く春や鳥啼き魚の目は涙  
〃

あらたふと青葉若葉の日の光  
〃

風流の初めやおくの田植え歌  
〃

松島や鶴に身をかれほととぎす  
曾良

夏草や兵どもが夢の跡  
芭蕉

卯の花に兼房みゆる白毛かな  
曾良

閑かさや岩にしみ入る蟬の声  
芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川  
〃

荒海や佐渡によこたふ天の河  
〃

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ  
〃

五月雨の降りのこしてや光堂  
〃

#### 4

俳句を指導する場合、教材としてどんな作品が適当かということを考えた場合、作品選定の基準や条件はいろいろ考えられるであろうが、一応次のようなことを配慮すべきであろうと思われる。

1. 俳句という立場から

○俳句史の上で、作品的価値が一般に認められ、その評価が定着している作品

○その作家の俳句に対する主張や理念が反映されている、いわゆる代表的作品

○俳句というジャンルの特徴や性格を理解させやすい作品

2. 児童・生徒の発達段階という立場から

○内容を理解しやすく、親しみを感じさせる作品

○生活体験につながり、児童・生徒の発達段階に応じて、思考や鑑賞の能力を深めていける作品

○語法や用語、または内容的に極端な抵抗や異和感の伴わない作品

○俳句の学習を通して学習の転移がはかれるような作品

3. 児童・生徒の生活の姿勢という立場から

○明るさ、意欲の感じられる作品

○健全な内容で共感を伴う作品

○日常生活感覚や生活条件と極端な隔りのない作品

といった作品選定の基準が考えられるであろう。

先に触れたように、「理解」領域のめざす能力と態度の要点は、

○目的、種類、形態に応じて効果的に読む（能力）

○適切な読み物を進んで読む（態度）

である。この点から俳句を眺める場合、小学校での俳句の学習は、児童が俳句という文学ジャンルに対する基礎的理解をはかり、簡潔な表現を基調とする俳句鑑賞の能力を養うとともに、すすんで俳句に親しみをもち、俳句を楽しんで読む態度を身につけさせることがねらいである。

さらに「表現」領域とのかかわりで考えるならば、「目的や内容にふさわしい文章を書くこと」「的確で効果的な表現をしようとする」方向をめざす学習をするということになるであろう。

こうした立場で俳句教材を考える場合、教材選定に当たっては、先に述べたような基準に立って教材が選ばれなければならない。

例えば、こうした一応の基準で現行教科書の俳句教材を眺めた場合、小学校教材としてとりあげられている

目には青葉山ほととぎす初がつを 素堂

しづかなる力満ちゆきばったとぶ 楸邨

などは教材として多少理解困難があると言えよう。

また、中学校の教材では

はこべらや焦土の色の雀ども 波郷

蒲公英のかたさや海の日も一輪

草田男

などの作品は、難易度からみて、中学生の一般的理解を越える作品とみられようし、他にも、俳句史上の評価が必ずしも定着していると思われる作品を挙げていることも問題であろう。

また、自由律の作品として、

シャツ雑草にぶっかけておく

月光ほろほろ風鈴に戯れ

咳をしてもひとり

が挙げられている。掲出の形は、作品鑑賞として

咳をしてもひとり

を挙げ（東書）、解説文中に

シャツ雑草にぶっかけておく

をとり上げ、さらに、鑑賞作品として

咳をしてもひとり

を掲出したり（学図）あるいは

月光ほろほろ風鈴にたはむれ

を解説文中にとり上げている（光村）などである。

俳句とはどういうものか、その特質や鑑賞の基礎的な能力を養う段階である、小学校や中学校で、自由律の作品を教材としてとりあげることが必要かどうか、このあたりに は再考の余地があると思われる。

さらに、現行教科書には掲出されていないが、次のような作品も教材として適当であろうと思われる。

若鮎の二手になりて上りけり

子規



除雪車にあかつきの天昏かりき  
 学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

秋桜子  
 誓子

秋の雲冷たき昼のミルク飲む

〃

とっふりとうしろ暮れるし焚火かな

たかし

乳母車揺るる林檎を持ちつづけ

草田男

小春日や石を噛みるる赤蜻蛉

鬼城

5

ここで、現行教科書における俳句教材の取り扱いについて眺めてみたい。

光村版『小学国語 六上 創造』では、単元「詩を読む」(詩・短歌・俳句)があり、同社の「学習指導書」によれば、単元に八時間を配当、そのうち俳句に二時間をあてて

目標の俳句の表現上の特質をおさえながら、

○俳句二句を情景豊かに読み味わうことができる(第一時)。

○俳句四句を朗読したり、その様子がよくわかるように書いたりして、情景豊かに読み味わうことができる(第二時)。

として、次のような学習活動を想定している。

時	1
学 習 活 動	<p>1. 俳句二句を読み味わう</p> <p>(1) 俳句についての表現上の特質を知る。</p> <p>問 ① 自分の知っている俳句を挙げてみよう。</p> <p>問 ② 短歌と俳句の似ている点、違う点をはっきりさせよう。</p> <p>(2) 「咲きみちて」の俳句を読み味わう。</p> <p>問 ③ 情景を思い描きながら視写しよう。</p> <p>問 ④ 「咲きみちて」「盛り上がる」の二つの言葉の効果を考えてみよう。</p> <p>問 ⑤ 季語のはたらきを考えよう。</p> <p>問 ⑥ 繰り返し朗読しよう。</p> <p>(3) 「リラの香」の俳句を読み味わう。</p> <p>問 ⑦ 季語に気を付けて、情景を豊かに思い浮かべよう。</p> <p>問 ⑧ 思い描いた情景を、様子がよく分かるように書いてみよう。</p> <p>問 ⑨ 繰り返し朗読して読み味わってみよう。</p> <p>1. 俳句四句を読み味わう。</p> <p>問 ⑩ 情景を詳しく思い描きながら視写をし、書き込みをしよう。</p> <p>問 ⑪ 七夕の様子を思い描きながら「草負うて」</p>

の句を読み味わおう。

問 学校の水泳風景やTVでの水泳競技会を思い描きながら「ピストルが」の句を読み味わおう。

問 野原の様子を思い描きながら「をりとりて」の句を読み味わおう。

問 夕焼けの様子を思い描きながら「坂くだる」の句を読み味わおう。

問 繰り返し朗読し、情景が豊かに思い描かれた俳句に、その様子がよく分かるように文を書いてみよう。

## 2. 俳句に親しむ。

問 新聞などから俳句を集めてみよう。

問 日常生活の中から題材を見付けて、俳句を自分でも作ってみよう。

と学習活動を想定している。（『学習指導書6』P 83～84）  
さらに次の「学習活動」の中で

## 2. 韻文に親しむ。

として「学習したことで、日常できそうなこと」の例として、

- ・ 日記の中に、詩や短歌や俳句を書く。
- ・ 同一作者の他の作品を調べる。
- ・ 「学級俳句大会」をする。

などを挙げている。

このことから、俳句教材の取り扱いの意図としては、

○俳句に対する基礎的な知識を身につけること。

○俳句の鑑賞をすること。

という学習活動を中心とし、その発展として、さらに

○連想作文を書くこと。

○他の俳句作品を鑑賞すること。

○俳句の創作と俳句会を行なうこと。

にまで及ぶことを期待しているとみることができる。

しかし、この学習計画をみると、教科書掲出の作品順序に従って、導入段階で

咲きみちて庭盛り上がる桜草

によって、「情景を思い描きながら」の視写、「咲きみちて」「盛り上がる」の効果を理解させようとするものであるが、入門期の児童に、さらに効率の高い学習過程を考えられないであろうか。

先に教材選定のところでも触れたところであるが、特に導入段階では、児童・生徒の生活体験、発達段階に即して、理解しやすく、興味・関心を引き出しやすい教材と、学習展開の方法を考慮することが大切であろう。

また、理解や鑑賞を深めた上で、その学習効果が、他に転移するような指導法が配慮されなければならないと考えられる。

ここで、光村版『小学国語 六上 創造』掲出の教材と、その『学習指導書』のねらいとすると、手をかりに、一部教材に変更を加えながら、俳句教材の指導計画を考え、てみることにしたい。

○国語科学習指導計画案例

- (一) 対象 小学校 六年  
教材 へ俳句

ピストルがブールの硬き面にひびく 誓子

草負うて男もどりぬ星まつり 波郷

羽子板の重きがうれし突かて立つ かな女

万緑の中や吾子の歯生え初むる 草田男

(二) 指導の目標

- ・俳句の特徴について基礎的な理解をさせる。
- ・俳句の鑑賞を通して、自然の美しさや、作者の心情を読みとる感受性を培う。
- ・自ら鑑賞文を書いたり、俳句を作ったりしようとする態度を培う。

(四) 学習の計画（全五時間）

第一次（一時間）

- ・俳句とはどんなものを理解させる。

第二次（一時間）

- ・表現の特徴や効果を理解しながら作品の鑑賞をする。

第三次（一時間）

- ・参考作品を読み味わう。

- ・学習のまとめ

第四次（二時間）

- ・作品の創作と鑑賞

へ注）この二時間は、課外活動、ゆとりの時間などを充てることも考えられる。

(五) 学習の展開

時	学習活動	留意点など
1	<p>○導入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・水泳体験やTVの競技会などを話し合う。</li> <li>・競泳について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・想定した場面のざわめき、緊張、期待感などを想起させる。</li> <li>・競技者、応援者の動作、心情を考えさせる。</li> </ul>
	<p>○展開</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ピストルが」の句について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんな場面か。</li> <li>・作者の位置</li> <li>・競技者の動作</li> </ul>

2			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○展 開</li> <li>・「草負うて」以下の句の鑑賞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感動の中心をさぐる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○導 入</li> <li>・連想文の発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○まとめ</li> <li>・「ピストルが」の句を散文化してみよう。</li> <li>・俳句の特徴について話し合う。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・草負う男に象徴される場面背景と星まつりの結びつきを考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感動の中心はどういうことか。</li> <li>・どんなことばによってわかるか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ一名、全体で五名程度。内容別に感想などを整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・競技者、応援者の心情、経緯</li> <li>・「硬き」の意味</li> <li>・場面を自由に想像して、散文化する。</li> <li>・季節      ・季語</li> <li>・形式へ五・七・五</li> <li>・連想作文を感想を交じえながら書かせる。</li> </ul>

3			
<ul style="list-style-type: none"> <li>○まとめ</li> <li>・俳句の特徴、表現上の特質、鑑賞の手順などを整理してみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時のまとめを想起する。</li> <li>・他の作品を鑑賞してみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各句の季節を考え季語を調べる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ことばの意味を調べ</li> <li>る。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・凝縮された表現</li> <li>・季語や切字のはたらき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント準備</li> <li>へ俳句作品、鑑賞の手びき</li> <li>・グループで話し合い、最後に発表。さらにプリントへ俳句の鑑賞の整理をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「万緑」と「吾子の歯」の対比を考える。</li> <li>・色彩の対比を考える。</li> <li>・それぞれの句の場面や情景、作者の心情を想像してみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「羽子板」「重きがうれし」から連想できることを話し合う。</li> <li>・「突かで立つ」にこめられた作者の心情を考える。</li> <li>・「万緑」の意味を考える。</li> <li>・「万緑」と「吾子の歯」の対比を考える。</li> <li>・色彩の対比を考える。</li> <li>・それぞれの句の場面や情景、作者の心情を想像してみる。</li> </ul>

5	4
<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちの作品を読み味わおう。</li> <li>・好きな句、共感できる句、うまいと思う句を選ぶ。</li> <li>・選んだ句について感想を発表する。</li> <li>・選ばれた句について発表し、作者の意図を話し、質問に答える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作句の心がまえ</li> <li>・作句をする。</li> <li>・作品を提出させる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品集へプリント配布。ただし作者名は本時終了時に公表する。</li> <li>・三つ五句ずつ自由に選ばせる。</li> <li>・高点五句板書を質問等も含めて感想を発言させる。</li> <li>・作句の意図、表現したかったこと、工夫したり苦労したことを自由に発表させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形式・季語のはたらし、推敲のしかたなどの概略を説明する。</li> <li>・眼前の景を素材に作句例をあげる。</li> <li>・各自作句する。</li> <li>・一人三句以上を目標にする。</li> <li>・順回指導で質問に答える。</li> <li>・小短冊を準備し、一句づつ書かせ、裏面に記名させる。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・作者の意図と選んだ児童の感想と比べながら話し合う。</li> <li>・さらに工夫するとよいところはないか。</li> <li>・他の作品でなおした方がいいところ、共感したところについて話し合う。</li> <li>・話し合ったことをまとめ、学習の発展をはかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現、用語、季語、切字など</li> <li>・プリント配布</li> <li>・表現や俳句のきまりを考えながら、作者の立場になって好意的に考えさせる。</li> <li>・作品集などを考えてみる。</li> <li>・趣味を広め感性や感覚を培うことを考える。</li> </ul>
--	---

へ本学助教授へ